

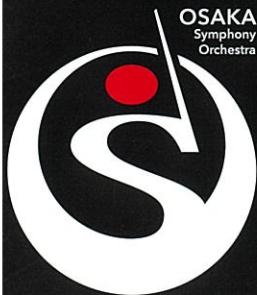


Osaka Symphony Orchestra
PROGRAM
MAGAZINE

2023/2024

1.2.3
January February March

- ▶ 第130回 名曲コンサート
2024.1/7 (日)
- ▶ 第268回 定期演奏会
2024.1/31 (水)
- ▶ 第269回 定期演奏会
2024.2/17 (土)
- ▶ 第270回 定期演奏会
2024.3/8 (金)



「大河に寄する美しき抒情」

演奏者

指揮/原田 慶太楼

ヴァイオリン/ステラ・チェン

曲目

林 光

国盗り物語 NHK 大河ドラマテーマ曲 (約3分)

Hikaru Hayashi: KUNITORI MONOGATARI NHK Taiga Drama Theme Music

花神 NHK 大河ドラマテーマ曲 (約3分)

Hikaru Hayashi: KASHIN NHK Taiga Drama Theme Music

山河燃ゆ NHK 大河ドラマテーマ曲 (約3分)

Hikaru Hayashi: SANGA MOYU NHK Taiga Drama Theme Music

エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 (約25分)

Erich Wolfgang Korngold: Concerto for Violin and Orchestra in D Major, Op.35

I Moderato nobile

II Romance: Andante

III Finale: Allegro assai vivace

..... 休憩

吉松 隆

交響曲 第4番 作品82 (約30分)

Takashi Yoshimatsu: Symphony No.4, Op.82

I Allegro

II Waltz: Allegro Moderato

III Adagietto

IV Finale: Allegro molto

主催/公益社団法人 大阪交響楽団

特別協賛/大和ハウス工業株式会社

後援/大阪府、堺市

協力/ザ・シンフォニーホール、

公益財団法人 堺市文化振興財団

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

関西から



関西元氣文化圏
参加事業

協力/日本音楽財団



特別協力/日本財団 Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

日本音楽財団

Nippon Music Foundation

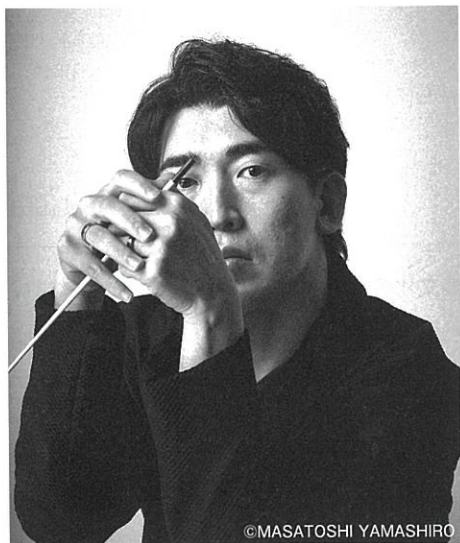
日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として、弦楽器名器の貸与事業を行っています。保有する世界最高クラスの弦楽器を21挺(ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、ガルネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺)を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っています。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されています。



ストラディヴァリウス1708年製 ヴァイオリン「ハギンス」

Stradivarius 1708 Violin "Huggins"

このヴァイオリンは、かつて、有名な楽器商ジャン＝バティスト・ヴィヨームが所有していた。1880年頃、ウィーン
の楽器商ザックがW.E.ヒル&サンズに売却し、その後、イ
ギリスの天文学者ウィリアム・ハギンス卿(1824～1910)
が購入し、生涯所有していたことから「ハギンス」と呼ば
れている。色艶も鮮やかで保存状態に優れている。日本
音楽財団は1997年よりベルギーのエリザベート王妃国
際音楽コンクール・ヴァイオリン部門優勝者に副賞とし
て次期コンクールまでこの楽器を貸与し、コンクールの
発展と演奏家の技術向上に寄与している。



指揮
Conductor



原田 慶太楼

Keitaro Harada

アメリカ、ヨーロッパ、アジアを中心に目覚ましい活躍を続けている期待の俊英。東京交響楽団正指揮者。シンシナティ交響楽団およびシンシナティ・ポップス・オーケストラ、アリゾナ・オペラ、リッチモンド交響楽団のアソシエイト・コンダクターを経て、2020年シーズンからアメリカジョージア州サヴァンナ・フィルハーモニックの音楽&芸術監督に就任。また2024年4月より、愛知室内オーケストラの首席客演指揮者兼アーティストック・パートナーに就任する。ヒューストン、インディアナポリス、NHK響、メンフィス、ルイジアナ、読売日本響、東京都響、ツーソン、フェニックス等のオーケストラと共演。オペラ指揮者としてもアリゾナ、シンシナティ、ブルガリア国立歌劇場、ノースカロライナなどで活躍。1985年東京生まれ。インターロックン芸術高校音楽科において、指揮をF.フェネルに師事。2009年、ロリン・マゼール主催の音楽祭「キャツソルトン・フェスティバル」にマゼール氏本人の招待を受けて参加。2010年タングルウッド音楽祭で小澤征爾フェロー賞、2013年ブルーノ・ワルター指揮者プレビュー賞、米国ショルティ財団キャリア支援賞6度、2023年には日本人初となるトップのコンダクター賞を受賞。2010年には音楽監督ジェームズ・レヴァインの招聘を受けてタングルウッド音楽祭に参加、2011年には芸術監督ファビオ・ルイジの招聘によりPMFにも参加。これまでに、ロバート・スパノ、マイケル・ティルソン・トーマス、オリバー・ナッセン、ヘルベルト・ブロムシュテット、ステファン・アズベリーなどに師事。第29回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第20回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。

オフィシャル・ホームページ: kharada.com/ @KHconductor

シェフからのメッセージ

大阪交響楽団の皆様とはこれまで多くのプロジェクトで共演してきました。毎公演、違う企画にチャレンジをし、フレキシブルで個性のある大響サウンドがとても好きです。コンサートを重ねるごとにオーケストラのメンバーとの交流も増え、ファミリーな空間で音楽作りができることは、とても幸せなことです。

私は2014年12月に日本デビューしました。ですので、もうすぐ10年目を迎えます。日本でのキャリアをスタートした頃は、私にとってとても大切なレパートリーであるアメリカとロシアの作品を中心に演奏してきました。ここ数年は自分が日本人の演奏家であるアイデンティティーにフォーカスをしています。日本人の私がクラシック音楽という海外の文化をやっているメリットはなんなのか。そして海外で演奏する時、外国人の方は私の音楽を体験して何が得られるのか。その答えを探するために、まず自分に足りないものを追求し始めました。それが日本人のレパートリー。まず初めにマエストロ山田和樹に日本人の作品を勉強したいと相談したところ、『慶太楼は絶対吉松さんを好きになると思う!』と言われ、数ヶ月後に彼の『アトムハーツ』を演奏しました。すぐに吉松ワールドが好きになり、

東京オリンピックの開会式でも演奏された交響曲第2番を含め、彼の交響曲チクルスを始めました。今回、大阪交響楽団で演奏する交響曲第4番で私の一人吉松交響曲チクルスがコンプリートするのです!

2000年に書かれた第4番を初めて聴くお客様にはこの公演後に、是非ご自宅で第3番の交響曲を聞いていただきたい。1998年に交響曲第3番が書かれた後、その反動のような交響曲を書きたいと思った吉松さんの作品が今回の4番になります。第4番交響曲は子供達が遊んでいる楽しい風景が感じられる作品になっています。天使や鳥たちが会話をしたり、子供心が音になった作品。ちなみに第3番交響曲は私と東京交響楽団のアルバムがありますので、そちらがおすすめです(笑)

演奏会の前半は日本の作曲家のテーマをキープしながら映画とテレビの作品を中心に選曲しました。70年代、80年代に大ヒットした【NHK大河ドラマ】の主題歌を作曲した林 光さん。そして20世紀のハリウッド映画音楽のDNAを築いたエーリヒ・ヴォルフガング・コロングルト。私たちの身近にあるテレビ、映画音楽の原点のマリアージュを楽しめるプログラムになっています。



ヴァイオリン

Violin



ステラ・チェン

Stella Chen

2019年ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクールにて優勝したステラ・チェンは、2020年にエイヴリー・フィッシャー・キャリア・グラント受賞、同年のリンカーン・センター新進芸術家に選ばれた。ハーバード大学から贈られるロバート・レヴィン賞の初代受賞者でもあり、2008年のメニューイン国際コンクールでは同コンクール史上最年少で入賞した。ニューヨーク・フィルハーモニック、ミネソタ管弦楽団、ヨーロッパ室内管弦楽団、シカゴ交響楽団、ベルギー国立管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニック、フィルハーモニー・ルクセンブルクなどのオーケストラ、イツァーク・パールマン、オスモ・ヴァンスカ、ロバート・レヴィン、マシュー・リップマンなどの演奏家と共演している。ハーバード大学とニューイングランド音楽院の共同学位プログラムにより、ハーバード大学にて学位を取得し、同時に、専門研究員候補としてクロンベルク・アカデミーに在籍した。これまでに、リ・リン、ミハエラ・マーティン、ドナルド・ワイラー・スタイン、イツァーク・パールマン、キャサリン・チョウ、ミリアム・フリードなどに師事している。現在、リンカーン・センターの室内楽協会員、ジュリアード音楽院でリ・リンのアシスタントを務めている。Platoonレーベルからリリースされたデビューアルバム「ステラ×シューベルト」はグラモフォン誌から高く評価され、自身は、2023年、同誌のヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。日本音楽財団から貸与された、ストラディヴァリウス1708年製ヴァイオリン「ハギンス」を使用している。

林 光(1931-2012)

国盗り物語 NHK大河ドラマテーマ曲**花神** NHK大河ドラマテーマ曲**山河燃ゆ** NHK大河ドラマテーマ曲

2001年に完成を見た混声合唱のための「原爆小景」などで知られる東京出身の作曲家、**林光**(1931-2012)は、10代で室内楽や管弦楽曲を発表し、〈音楽の神童〉と称された早熟型。いわゆる昭和一桁世代の作曲家にして、戦後日本における社会派音楽の筆頭格であったといえます。1953年、〈音楽のあらゆる分野にわたって日本の国民音楽の発展に努力してゆきたい〉というマニフェストのもと、作曲家の間宮芳生氏や、昨夏に逝去された、大阪交響楽団の名誉指揮者で作曲家の外山雄三氏と共に「山羊の会」(1953-1958)を立ち上げ、大衆との繋がりを理念として、平和をはじめ、労働、子ども問題など政治意識を強くもった音楽活動を生涯にわたり展開していった林さん。その林さんが世に残された数々の作品の中で、とりわけ娯楽性に溢れたものとしてあげられるのは、何といても3つのNHK大河ドラマのテーマ曲でしょう。

「**国盗り物語**」(1973)は、美濃のまむし、こと斎藤道三、織田信長らを巡る戦国時代物。作曲者曰く、この音楽の前半は〈騎馬武者の走りをイメージ〉、後半は〈取るべき天下をはるかに望むというような夢の音楽〉。また興味深いことに、故・坂本龍一氏は曲の序奏部を〈ハリウッド映画の音楽のようなニュアンス〉と表現しています。

「**花神**」(1977)は、大村益次郎をドラマの中心に据え、ペリー来航、幕末から明治維新を描いた群像劇。音楽的にはリムスキー＝コルサコフの「シェエラザード」の第1楽章《海とシンドバッドの船》からの引用(バルカローレ[舟歌]のリズム)があり、海を渡る黒船のメタファーとなっています。

「**山河燃ゆ**」(1984)は、太平洋戦争を巡る大河初の昭和史ドラマ。この曲の冒頭(トレモロ部分)のイントロ・クイズをすれば、きっとアメリカのテレビ・ドラマ「スパイ大作戦」のオープニング・テーマと答える人が出そうほど瓜二つ。さらにはアメリカに渡ったかのドヴォルザークの作風を彷彿とさせるペンタトニック(五音音階)によるメロディを曲中に組み入れるなど、アメリカに因んだ林さんのユーモアある職人技がきらりと光ります。

国盗り物語

放送 1973年**録音** 森正指揮、NHK交響楽団

楽器編成 フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バストロンボーン、チューバ、ティンパニ、シロフォン、タンバリン、サスペンデッドシンバル、マラカス、ボンゴ、ウッドブロック、バスドラム、タムタム、ハーブ、ピアノ、弦5部

花神

放送 1977年

録音 山田一雄指揮、NHK交響楽団

楽器編成 フルート3、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、タンバリン、サスペンデッドシンバル、ハープ、ピアノ、弦5部

山河燃ゆ

放送 1984年

録音 外山雄三指揮、NHK交響楽団

楽器編成 フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バストロンボーン、ティンパニ、スネアドラム、サスペンデッドシンバル、トライアングル、ハープ、チェレスタ、弦5部

エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897-1957)

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

楽都ウィーンの街を歩くと、19世紀末のユーゲントシュティール——植物や女性のシルエットなどをモチーフにした柔らかな曲線美や金装飾などが特徴のドイツ語圏の美術様式で、文学や音楽の分野にも影響を与えた——による、様々な建築や美術が目を楽しませてくれます。

そのユーゲントシュティールの語源となった美術雑誌「ユーゲント(JUGEND)」がミュンヘンで創刊された翌1897年、作曲家**エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト**(1897-1957)はオーストリア＝ハンガリー帝国のブリュン(現チェコのブルノ)でユダヤ系の家庭に生まれ、4歳でウィーンに移り住んでいます。幼少より、モーツァルトにあやかったヴォルフガングというミドルネームの名に恥じぬ神童ぶりを発揮。コルンゴルトは濃厚な後期ロマン派音楽の衣鉢を継ぎ、23歳時のオペラ「死の都」(1920)で大成功を収めます。しかし1930年代、ナチスの台頭による反ユダヤ主義の高まりもありアメリカに(1943年にアメリカ国籍取得)。この地でハリウッド映画音楽の作曲に専心、一躍名を成しました。

そんなコルンゴルトの全3楽章からなる**ヴァイオリン協奏曲**は、第2次大戦後にウィーンの楽壇、そしてクラシック作曲家として復帰を果たすべく、1945年に完成した作品。自作の映画音楽からの引用——第1楽章では「砂漠の朝」(1937)及び「革命児ファレス」(1939)、第2楽章は「風雲児アドヴァース」(1936)、第3楽章では「放浪の王子」(1937)——が作品を甘美にして抒情的、また時に軽妙に彩るほか、眩いばかりの爛々たるオーケストレーション、そして華麗なヴァイオリン・ソロにあらわれるしなやかな装飾的音型などは、まさにユーゲントシュティールを彷彿とさせるもの。ハリウッドでの所産、そしてコルンゴルトのウィーンへの

郷愁がじんと伝わってくる名作です。

作曲年代 1937-1945年

初演 1947年2月15日、セントルイス、ヤッシャ・ハイフェッツ独奏、ウラディミール・ゴルシュマン指揮、セントルイス交響楽団

楽器編成 独奏ヴァイオリン、フルート2(うち1名ピッコロ持ち替え)、オーボエ2(うち1名イングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2(うち1名コントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ヴィブラフォン、シロフォン、グロッケンシュピール、タムタム、チューブラーベル、チェレスタ、ハープ、弦5部

吉松 隆(1953-)

交響曲 第4番 作品82

今から20余年前の2001年の新緑の5月、ザ・シンフォニーホールで公開世界初演され、色鮮やかに鳴り響いたオーケストラ音楽があります。それは、東京出身の作曲家、吉松 隆(1953-)の全4楽章からなる**交響曲第4番**——田園風にしておもちゃ箱的な作品で、初演時のプレトークでは、吉松さんがこの交響曲第4番をくふつつかな娘ですが…と親心のよう¹に、微笑ましさをもって紹介されました。藤岡幸夫氏の指揮のもと、関西フィルハーモニー管弦楽団のみなさんが心を一にしてこの作品を演奏。初めて聴く音楽なのにしみじみと懐かしく、心に染み入るような一期一会の音楽体験として、今でも筆者の目に耳にしっかりと刻み込まれています。

その吉松さんといえば、前衛的で難解な現代音楽の〈非音楽的な傾向に異を唱え、調性やメロディを全面的に復活させた独自かつ異端の路線〉を貫いてきた作曲家。いわゆる「劇伴」の分野では、NHK大河ドラマ「平清盛」(2012)の音楽、「プログレ」でいえばエマーソン・レイク&パーマー(EL&P)のセカンド・アルバムのタイトル曲「タルカス」のオーケストラ版編曲(2009)をはじめ、ポップス、ジャズ、モード、ミニマル音楽、民族音楽、邦楽の要素などを取り入れた実に縦横無尽な創作・作風は、空に煌めく星々の如く、空を自由に舞う鳥たちの如し。1974年、21歳の作で作品番号1をもつのがピアノ曲「シリウスの伴星によせる」、そして《現代の音楽展'81》で初演された弦楽オーケストラとピアノのための「朱鷺によせる哀歌」(1980)を作曲家としてのデビュー作として、以後吉松さんの作曲の主要なテーマが、〈星〉や〈鳥〉などを巡るものとなっていったのは象徴的といえるかもしれません。その〈鳥〉は、交響曲第4番においても(初演時の吉松さん自身のプログラム・ノートに記されているように)重要な音楽的要素となっています。

第1楽章[アレグロ]は、吉松さんによると〈さまざまなビート(リズム)とモード(旋法)の間を走り回る〈鳥〉の思考によるアレグロ楽章〉。リディアン・モードを感じさせる、ふわりと無重力的で春の風のように爽やかな主要主題(この交響曲全体を有機的に統一する循環主題で

もある)に始まります。この主題の精妙なヴァリエーション(変奏)、そしてミニマル音楽の手法を取り入れた音楽の流れはとて流動的。鳥の囀りを思わせるモチーフなどを挟み、主要主題から導かれた抒情的な副主題(後の第3楽章の主題を形成する)が奏でられます。一転して子供のおもちゃ箱をひっくり返したように賑々しいソナタ形式の展開部的様相に。後に2つの主題が再現され、夢の余韻のような静けさの中に楽章を閉じます。

第2楽章[ワルツ]は、3拍子に2拍子などが交錯する可変拍子系のスケルツォ(冗談)楽章。吉松さん曰く、楽章の後半では様々な交響曲作曲家からの引用——ベルリオーズ(幻想交響曲・第2楽章「舞踏会」、以下丸括弧内の曲詳細は筆者による補足)、ブルックナー(交響曲第9番・第2楽章)、ショスタコーヴィチ(交響曲第10番・第3楽章)、マーラー(交響曲第1番・第3楽章)、ベートーヴェン(交響曲第9番・第2楽章)——があるほか、吉松さんのピアノ曲である「ベルベット・ワルツ」(「3つのワルツ」の第3曲)もあらわれるなど、実にシュールな音パレードが繰り広げられます。

第3楽章[アダージェット]は、前述の初演時に部分的にアンコール演奏された、この交響曲の白眉といえる哀歌的な美しき緩徐楽章。慈愛に満ち、しかも決して叫ぶことのなかった深遠な想いや願い、痛切な祈りのような内容を湛えた、情感に強く訴える音楽といえます。また曲中では、吉松さんが〈オルゴールのメロディ〉と呼ぶ自作のピアノ曲「緑のワルツ」(「3つのワルツ」の第1曲)があらわれ、しっとりと懐かしみを帯びて響きます。

第4楽章[アレグロ・モルト]は、〈春を讃えてひたすら明るく軽やかに走り抜ける Rond 風フィナーレ〉。この楽章の飄々とした浮遊的感覚は、シリアスな現代音楽からの離脱を鳥の軽やかなステップになぞらえて作曲されたという吉松さん新進時代の「デジタルバード組曲」(1982)との親近性を感じさせるもの。〈鳥たちのパッセージと、春の野をスキップするようなリズム〉に満ち、ミニマル音楽に通じるテクスチャや色彩的なオーケストレーションが、この交響曲の第1楽章と呼応する夢のようなユートピアの世界へと誘います。

さて、この交響曲は公開世界初演からすれば人に例えると早二十歳過ぎ。〈ふつつかな娘〉から、今宵は〈素敵なおレディ〉となった姿を我々にあらわしてくれるのでしょうか。

作曲年代 2000年

初演 [公開世界初演]2001年5月29日、大阪のザ・シンフォニーホールにて、藤岡幸夫指揮、関西フィルハーモニー管弦楽団
[録音初演]2001年3月27、28日、イギリスのマンチェスター(BBCスタジオ7)にて、藤岡幸夫指揮、BBCフィルハーモニック

楽器編成 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、テューバ、ヴィブラフォン、チューブラーベル、マリンバ、トライアングル、カウベル、カバサ、アンティークシンバル、ウッドブロック、カスターネット、マラカス、ギロ、タンブリン、アゴゴ、クワイカ、ジングルベル、スレイベル、ベルツリー、スネアドラム、ティンパレス、コンガ、トムトム、パズドラム、ハイハットシンバル、シンバル、サスペンデッドシンバル、タムタム、ピアノ、弦5部